

山手線 栗毛

テクニカルライター

小田嶋 隆

私は恵比寿には生まれてこの方1度しか行ったことがない。

実をいうと恵比寿を正しく

発音することすらできない。

「えびす」のアクセントはどっちにあるっ。

恵比寿は・・・

と、書きはじめて、私は、それっきり、20分ほど、絶句している。

・うむ・・・うむ・・・うむうむ・・・
 ・ううっ・・・ううっ・・・ううっ・・・
 ・う・・・と、絶句だけで紙面を埋めたいような気分だ。

実は、前々から1度この手法(全面絶句)を試してみたいと思っていたのだが、編集者が恐くていまだに実現できないでいる。

仕方がない。どうせ日本の出版界は、この種の実験性を容認できるほどには熟していないのだ。

「オタジマさん、何ですか、この原稿は？」

「ええと、まあ、早い話が絶句なわけですけど、なんか余韻というのか含蓄というのか、そういうものを感ぜませんか？」

「困るんですよ、余韻と含蓄だけで内容がないっていうのは」

「そうかなあ、そういう小説家って多いと思うけどなあ」

「とにかく、書き直してください」

「・・・」

その点、芭蕉は偉かった。言うに事欠いて

「松島や ああ松島や 松島や」

である。

こういつふざけたまねをあの人200年も前に堂々とやってのけたのである。

話を恵比寿に戻す。

私は恵比寿という町をほとんど知らない。言わせて貰えば、東京の北のはずれで生まれ育った人間に取って、恵比寿から先は、四国や九州と同じようなものだ。たとえば、私はこれまでに京都に5回行ったことがある。しかし恵比寿には、乗換や通過を除けば1度しか行ったことがない。つまり私にとって恵比寿は、京都よりもずっと遠いところなのだ。

の念に襲われた。

かように、アクセントというのは馬鹿にならない。なぜなら、それは、言葉そのものが持っている意味よりも、もっと微妙な意味を含んでいる場合があるからだ。

たとえば、我々は仲間内でしゃべる時などに、よく言葉を言い替えて使う。新宿を「ジユク」と言ってみたり、BMWを「ピーエム」と呼んだり、「高橋さん」を「ゲーハ」と呼んだりするのがそれだ。また、広告屋は、便所を「サニタリールーム」と呼んだり、借金生活でしかないものを「クレジットライフ」と言い替えていたりする。そうすることによって、たぶん彼らは、新味を出そうとしたり、真相を隠そうとしたり、仲間意識を強調しようとして

ぜび、ご理解いただきたい。京都の人間が御所や三千院に行かないのと同じように、東京の人間だって、東京中をくまなく歩き回っているわけではないのだ。むしろ、東京の全域について、詳細な知識を持っていたりするのは、往々にして他府県出身の人々なのだ。

事実、大学に入る前まで、私は六本木にも赤坂にも行ったことがなかった。渋谷にもほとんど出かけなかった。飯倉だとか青山だとかについては、そういう町が東京にある事さえ知らなかった。理由は簡単。行く必要がなかったからだ。ほとんどすべての用事は池袋で足りたし、池袋で間に合わないような事は、私には必要なかったからだ。

大学に入ってから、地方出身の連中の東京探検に付き合っ、六本木やら赤坂に出かけたりもしたが、じきにまったく行かないようになった。

恵比寿

屋敷代を節約して六本木に出かけるような連中と付き合っている、自分まで田舎作になりそうな気がしたからだ。

さて、私は先ず、「えびす」というこの地名の発音の仕方を知らない。

もう少し詳しく書くと、「えびす」のような三音節の言葉のアクセントには、たぶん

- 1・「花子」「トマト」「長野」と同じように一音節目を高く発音するタイプ
- 2・「たつ」「すいか」と同じく、平板に発音するタイプ
- 3・「お船」「闇夜」「歩く」のように、三

いるのだ。

アクセントの言い替えも同じような効果を狙ったものだ。しかし、それは、言葉の言い替えよりもさらに微妙な感情を反映している。

たとえば、今から十数年前、「サーファー」という風俗が現れはじめた頃、人々はこの言葉を「オーバー」や「コーナー」と同じように、頭アクセントで発音していた。

ところが、単なるファッションでサーファーをやっているのではない、実際にサーフィンをやる本物のサーファーたちは、自分たちを「サーファー」と、「登校」「象徴」と同じ平板アクセントで呼んで区別していた。

現在、サーファーのアクセントは後者に統一さ

音節目を低く発音するタイプ

の3種類ぐらいがあるはずなのだが、私には、「えびす」がどちら3ではないということとは分かって、1と2のうちのどちらが正しいのか確信がもてないのだ。で、1のアクセントで言ったものなのか、2のアクセントで発音したものか迷ったあげくに、私はこれまで、「恵比寿」という言葉を自分達の会話から排除して33年間を生きてきた。

こういうのは本当に困る。

「おいど」と言いつつ

特に人の名前や地名は、アクセントが不明なものが多くて困る。というよりも、人名や地名の場合、人や地方によってアクセントがバラバラであるのかもしれない。

そういうえば、大阪で営業マンをやっていた頃、同じ東京出身の田中という男が、皆に3のアクセントで「たなか」と呼ばれることに悩んでいた。どうやら関西では「たなか」は「たなか」になるらしいのだ。

「ぼくはたなかではありません」

「えっ、何を言ってるんだねたなかケン」

と、はじめのうちは、しきりに自分が「たなか」であることを主張していた田中であつたが、最終的には自分でも「もしもたなかです」と言うようになっていた。

「仕方がないよ。大阪で営業やつてるわけなんだからさ」

と、そうやって、彼は自分のアイデンティティを徐々に失って行った。

かく言う私も

「毎度」

を2のアクセントで発音する度に

「ほつまいど」と来たか、兄さん。あんな関東モンぢやうか？」

とからかわれて、大いに困っていた。どうやら、関西、少なくとも大阪の商人の間では「毎度」は絶

れているようだが、ともかく、この言葉が一般化するまでには、こうした事情があつたのである。「ハッカー」についても、似たようなことが起こっている。一般人は「ハッカー」を、頭アクセントで発音しているが、ハッカー自身は、自分たちを「ハッカー」と、平板アクセントで呼んでいるのだ。きつと彼らは、世間から決めつけられているイメージに反抗するために、アクセントを変えているのだらう。

あつ、恵比寿の話を全然してないうちに終わってしまった・・・絶句・・・。



Illustration. Takeuchi Kazuya